

# 地域創生論に係るフィールドワークモデルの構築に関する研究

武田英樹

## 1. はじめに

近年、地域住民のニーズは複雑化・複合化しており、包括的な支援体制の構築が求められている。このような状況下において、2016年6月2日に「ニッポン一億総活躍プラン」が閣議決定され、「地域共生社会：子供・高齢者・障害者など全ての人々が地域、暮らし、生きがいを共に創り、高め合うことができる社会」の構築が推進されることとなった。2021年には、「地域共生社会の実現のための社会福祉法等の一部を改正する法律」が施行され、各自治体においての包括的な支援体制の構築も進められている。

自治体では福祉専門職採用が進められ、生活困窮者自立支援法に基づく相談支援においても相談窓口には社会福祉士の配置が進んでいる。ここで求められる相談支援の在り方は、これまでのような法律ごと、あるいは分野ごと、部署ごとに「高齢者」、「障害者」、「子ども」、「貧困者」などに分けて対応されていたものではなく、分野、属性や世代を問わない相談体制とそれらに対応できるソーシャルワーカーの配置である。まさに地域づくりにおいて、ソーシャルワークの必要性は今まで以上に高まり、社会福祉士の専門性の向上がより一層求められる。

では地域で求められるソーシャルワーカーとはどのような専門職像となるのか。ソーシャルワーカーには、「全世代・全対象者の福祉ニーズを総合的・包括的に捉え、人々とそれを取り巻く環境、地域社会に働きかけ、多様な社会資源を活用・開発していく」実践が求められる<sup>1)</sup>。このソーシャルワーク実践力を構築していくには地域実践の中で養われることが有益といえる。

さて、本研究の目的は、美作市上山集落をフィールドとし、年間を通して学生が地域活動に参加することで、上山集落をフィールドとしたソーシャルワーク実践プログラムの構築を図ることにある。

## 2. 上山集落とは

上山集落とは、旧英田町、美作市南部の大芦高原に位置する集落である。2021年3月現在、人口：150人（65世

帯）うち45人（23世帯）が2010年以降の移住者であり、住民の約30%を占める。高齢化率は40%である。主な産業は、農林業で農地面積として約100ヘクタールを有している。最盛期には800人～1000人ほどが居住していたが、「人口減少」「高齢化」「コミュニティ機能の低下」「耕作放棄地の増大」「鳥獣被害の発生」「伝統文化の衰退」などにより限界集落となることが危惧される状況が問題となっていった。これに対して、美作市では地域おこし協力隊を積極的に募り、移住した若者たちが地域住民と協働で8300枚あるといわれている棚田再生を中心に地域活性化に向けた取り組みを行い、その活動についてTVやマスコミ等で取り上げられ注目を集めている。

近年では上山集落での取り組みを知った若者たちが新たな地域おこし協力隊としてこの地域に移り住み、地域おこし協力隊の任期が終了したのちもそのまま定住し、棚田再生や鳥獣対策に取り組むことに加え、衰退した伝統行事（祭事）を復活させたり、閉鎖が危ぶまれたキャンプ場の運営を引き継いだり、古民家を再生しカフェをオープンさせたり、新たな商品を開発したり、地域の福祉事業に関わるなどし、地域創生への取り組みを次々と展開している。

## 3. 上山集落での実践活動

### 1) 現地コーディネーターとの調整と学内勉強会の実施



もともと本学には「上山で学ぼう地域の輪」という上山集落で活動する学生による自主ゼミグループがある。学生た

ちは当地域を訪れて地域住民と一緒に活動することでコミュニティの在り方を学ぼうという目的のもと活動していた。しかし、実際のところ活動とソーシャルワークの関係性などを専門的視点から振り返る機会があったとは言い難いのが現状であった。専門的知識と地域活動の融合が図れる環境にありながら経験のみで完結している状況が目立っていた

活動年数を重ねる過程で卒業研究において、社会福祉士の専門性を活かし上山集落に地域おこし協力隊として移住することを希望する学生や上山集落の活動とソーシャルワークの関係について学術的に整理・分析する学生が認められるようになった。

また移住者のなかにも社会福祉士、医師、看護師などが認められ、専門職として地域に関わっている状況が増えてきたことから、学生たちもより専門的視点に引き付けて経験から専門的学びへと転換していける環境が整ってきた。

これらを背景に当自主ゼミグループはより地域創生に係るソーシャルワーク実践を学ぶ活動を目的としたグループであることをより明確化するために「上山コミュニティワーク実践研究会」に名称を変え、現在の活動に至っている。

しかし、年間を通じての地域活動に参加することで医療・福祉の専門職との関りは増加したが、それぞれの活動が単発的となりやすく必ずしも系統だったものではなかった。よって年間を通じての活動が必ずしも建設的な学びに繋がっているわけではない状況にあった。

2021年度はコロナウィルスの感染拡大を受け、大学での学外活動が制限されたことにより予定していた行事が直前で中止となることが度々あった。また3密回避のため参加人数も制限される活動となった。

4月に3年生の新役員と4年生の旧役員が上山集落を訪問し、現地コーディネーターを担う現地住民と顔合わせを行った。続いて、学生上山集落に移住し、現在も様々な活動に携わっている住民2名を講師として大学に招聘し、学内で上山集落の取り組みについての勉強会を実施した。当勉強会は上山コミュニティワーク実践研究会3年生が主催し、社会福祉学科1年から4年までの学生が参加した。2年から3年生までは年度初めのスタートアップ研修として、4年生は3年生への引き継ぎとして、1年生について

は新入生入会説明会としての意味合いがあった。

## 2) 上山集落の社会資源視察と行事参加

学内勉強会の後、上山集落を訪問し、コーディネーターの手配のもと学生たちは地域散策する中で様々な地域資源を訪れることで地域住民との交流や地域理解に努めた。現在は観光資源になっている展望台から上山集落の概要について把握した。



またトヨタモビリティ基金による「岡山県 上山集楽（しゅうらく）みんなのモビリティプロジェクト」<sup>2)</sup>に取り組んだUEYAMA MOBILITY PROJECT OFFICEを訪問し、スタッフと交流する過程で、上山集落での暮らしや活動について話を伺った。さらに古民家カフェいちょう庵を訪問し、運営者や常連客と交流を図った。


上山集落の社会資源である大芦高原キャンプ場を活用して防災研修に参加した。災害によりインフラが停止した場合にどうやって火を起すか、また火気を扱う上での注意点などを学んだ。実際に起こした火を活用して焚火トークのワークショップを行い、学生同士の交流会も行った。また、上山集落住民の中心的な仕事である棚田での農業に関

して田植え準備から稲刈り、収穫祭などに参加し、住民とともに作業することで信頼関係の構築を図ることができ、これらの活動を基盤に住民へのインタビューを実施することができた。また上山集楽移住者による研修会も実施することができた。



#### 4. 上山集落での活動から見てきたキーワード

今回のフィールドワークは度重なる直前での中止に伴い、年間を通しての系統的なモデルを構築するための実践を蓄積するには至らなかった。しかし、上山集落での活動は中山間地域をフィールドとしたソーシャルワーク実践能力の向上を目的とした教育資源があり、医療福祉の専門職が住民としてその専門性を活かしながら生活している環境は有益である。また、活動の中で住民だけでなく、上山集落の活動に賛同して外部から活動のために通ってくる者との交流も見られた。これらは、まちづくりについて、移住・定住ありきではなく、地域を訪れる人の流れを社会資源に置いた移動型の地域創生モデルを学生たちが分析していく機会ともなると考える。そして、上山集落の住民と継続的に関わっていくことで地域から産み出される事柄について、根源となる活動に対する challenge（挑戦）の意識とそこから生み出される活動力について、地域実践から学ぶ環境が整っていると考える。

上山集楽から発信されているキーワード 

〇〇+α



地域の発展

図1 上山集落から発信されているキーワード

これらを踏まえ、上山集落から発信されているキーワー

ドは、「〇〇+α」で表現することができる。このキーワードは地域発展の要素であり、ソーシャルワーカーが中山間地域で意識すべき視点となると考える。例えば、「伝統行事（祭事）の復活+集客イベント」、「古民家再生+カフェ起業・民泊などの起業」、「鳥獣対策+革製品開発」、「棚田再生+企業研究」、「農業+商品開発によるブランディング」、「雲海など自然+観光」、「キャンプ場再生+フェス」、「福祉+仕事とコミュニティ」等である。

## 5. 総括

空閑はソーシャルワークの機能として、①クライアントの問題解決能力や環境への対処能力を強化するための機能、②クライアントと必要な社会資源との関係構築・調整のための機能、③機関や施設の効果的な運営や相互の連携を促進するための機能、④制度や施策の改善・発展、または社会全体の変革を促すための機能の4つの機能をあげている<sup>3)</sup>。この4つの機能をフィールドワークを通して修得していくことは、地域をキャンパスとした実践力を高めていく上で教育効果が高いのではないだろうか。

さらに地域を教育の場に加えることに加え、学生たちが地域活動に参画し、地域貢献していける存在にも成り得る。年間を通して、さらには年数を重ねてフィールドワークに取り組む場合に学生は学ぶ者の立場だけでなく、地域貢献する者として役割も担うことが期待できる。すなわち、地域発展に繋げていく上でのフィールドとしてソーシャルワークを必要とする課題があり、そこに「〇〇+α」に当てはまる社会資源があり、これらを含んだ地域でどのような実践からどのような教育効果が得られるのかという教育の視点の3つを意識していくことが必要である。



図2 フィールドワークの要素

## 引用文献

- 1) 第9回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会「日本社会福祉士会 参考資料」2017年2月7日.
- 2) TOYOTA ホームページ「棚田に吹くイノベーションの風 1000年の里山に笑顔の連鎖」.  
[https://www.toyota.co.jp/jpn/sustainability/social\\_contribution/vision/smiles/](https://www.toyota.co.jp/jpn/sustainability/social_contribution/vision/smiles/) (2022年6月30日)
- 3) 空閑浩人 (2015)「相談援助の視座と展開過程」日本社会福祉士会編『基礎研修テキスト上』p37-43.

## 参考文献

- ・英田上山棚田団ホームページ  
<http://tanadadan.org/> (2022年6月30日)
- ・上山集楽ホームページ  
<https://ueyama-shuraku.jp/> (2022年6月30日)